

江戸の百姓たち、幸谷村、酒井家文書

本書の「はじめに」では、

「江戸時代の百姓は無学で、読み書きができなかった」、
「村は閉鎖的な社会で、村人は村外のよそ者とは付き合わなかった」、
「百姓は武士に対しては服従するだけの無力な存在だった」、
「江戸時代の農業は自給自足的だった」

といった、江戸時代の百姓と村についてのイメージを4点挙げて、そうしたイメージの妥当性について、具体的な事例に基づいて、考えている。

第一章では、江戸時代の村と百姓について、基本的な事柄を簡潔に述べている。

第二章は、幸谷村の村人たちが、自ら年貢に関する計算を行い、多くの文書を作成していたことを示している。

また、百姓たちは武士に頼りきったのではなく、村のルールを自主的に定めて、違反者の摘発や処罰も自ら行っていた。

彼らは自主的・自律的に村を運営しつつ、必要に応じて領主の力を借りることによって、村での暮らしを維持・向上させようとしていた。

第三章では、村内に起こった争いを解決するにあたって、証拠文書の有無や記載内容が重要な意味を持ったことがわかります。

そうした文書の多くは、百姓自身が作成したもので、江戸時代のかんりの百姓たちは、文書を作成したり、その内容を理解したりする能力を持っていた。

また、村に賦課された年貢の各戸への割り当て分を計算する能力もありました。

そして、作成、授受した文書を大切に保存もしていました。

文書が、後日の権利証名や争いの公正な解決のために必要だと言うことを理解していた。

これらは、第二章で述べた事と重なる。

百姓たちは、決して無学・無知な存在ではなく、文書の重要性を十分に認識していた。

酒井家の古文書も、そうした先人たちの思いのもとに、大切に保存されてきたのである。

第四章では、利水と治水と言う一村だけでは解決できない課題については、関係村々が時には争いつつも、日常的には緊密に連携していたことがわかります。

今日よりも低い技術水準のことで、何とか水害を防止し、暮らしを守ろうと、百姓たちは幕府や領主の指導・援助を受けつつ、自主的に協力しあっていたのである。

今日のようにコミュニケーション手段が発達していなかった江戸時代にあっても、百姓たちは村を越えて連絡を取り合い、共同して課題の解決を目指していました。

百姓たちの世界は、村の枠を超えて広がっていったのである。

第五章では、百姓たちが、領主の役人の罷免を実現した事例を紹介している。

百姓たちは、武士に対して、頭が上がらない無力で弱い存在ではなく、言うべき事は厳然

と自己主張する存在であった。

そうすることで、自分たちの暮らしを守り、改善していこうとしたのである。

領主も、百姓たちの意向や要求を無視することはできませんでした。

身分格差のもとでも、百姓たちは決して「物言わぬ民」ではなかったのである。

ただ、百姓たちは領主の過大な経済的要求を全面的拒否することはできなかった。

幕末になると領主の御用金などの賦課がますます過重になり、百姓と領主の間の矛盾が深まっていったことも見逃てはなりません。

そうした中でも、百姓たちは領主に対して「ものを言う」ことで、領主と対峙し、相互にせめぎあいつつ、自分たちの生活を守っていったのである。

第六章では、百姓たちが購入肥料を積極的に導入して、農業生産を増大させようとしていた様子が取り上げられている。

江戸時代には魚や人の排泄物が貴重な肥料であり、それらは九十九里の浜辺や江戸の町から幸谷村へと運ばれたのである。

それらの売買の際には、文書がやり取りされたとし、トラブルが起これば訴訟文書が作成されました。

百姓たちは、商取引の世界で不利益を被らないためにも、読み書き・計算の能力を身に付ける必要があったのである。

以上、自分たちの暮らす村を自治的に運営していた百姓たち、

読み書き・計算を学んで、盛んに商品の売買を行い、

ときには積極的に訴訟を起こして要求を実現しようとする百姓たち、

広範囲にわたって結びつきを広げることで災害に立ち向かった百姓たち、

武士に対しても毅然と自己主張する百姓たち、

そうしたたくましい百姓たちの姿が浮かび上がってくるのではないか

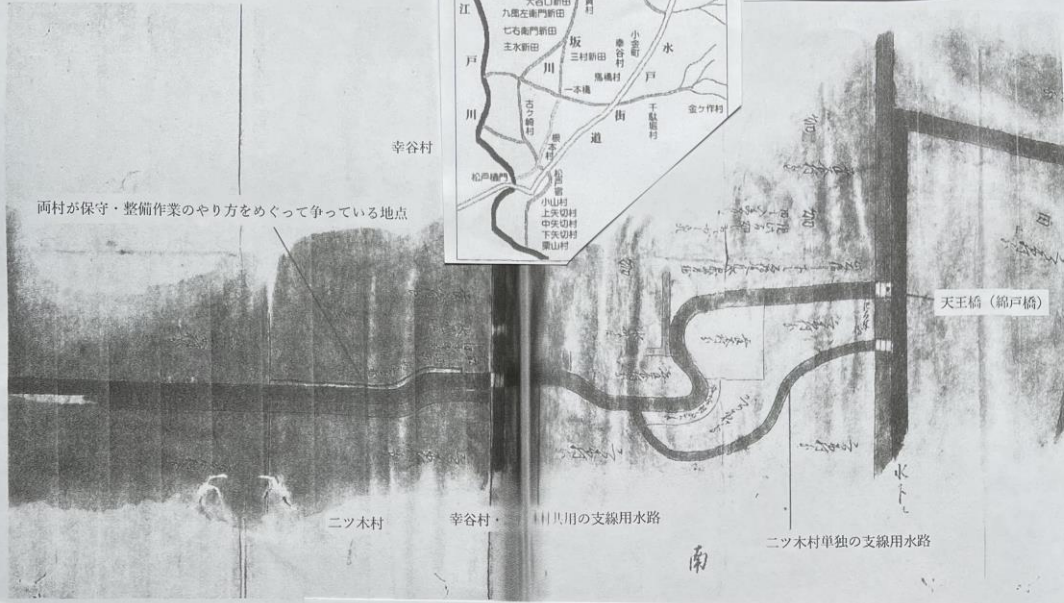
本書は、江戸時代の百姓たちの実情を知る一助となる。

この本は、江戸時代の百姓をベーシックに理解するには丁寧な説明がされている本だと思う。

特に、各章の最後にその章を代表する古文書をセットしてあり、かつ「翻刻+読み下し+現代語訳」を付けて頂いている。

したがって、古文書の初学者が手に取ってじっくりと読めば、よいテキストになる著書です。

② 江戸川・坂川と流域の村々
(透辺尚志『隠棲が三人いた村』
嵩書房出版、2017年、より転載)



両村が保守・整備作業のやり方をめぐって争っている地点

天王橋 (綿戸橋)

幸谷村

二ツ木村

幸谷村・二ツ木村共用の支線用水路

二ツ木村単独の支線用水路

南

① 幸谷村・二ツ木村共用の支線用水路を描いた絵図
記載の一部を活字に改めました。

◆ 古文書を読む その3 (これは、『松戸市古文書目録(3)』の整理番号一五一番の文書です)

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely a document related to water rights or village affairs. The text is written on a piece of paper that is part of an open book.

【翻刻】

乍恐以書付奉願上候

一御知行所下總国幸谷村惣百姓奉申上候

儀者天明三辰年砂降後川床高二相成

大雨之節者台方四拾ケ村方水落

田畑一凹溢皆水損ニ相成難済至極仕

依之二十ヶ年以前方坂川堀頼仕候処

此度御聞濟相成然処川上横須買橋方

松戸迄二里余之場所川淺不仕候而者水落

不宜候ニ付往古方水緑村之儀ニ付助来り候ニ付

水腐高百石ニ付人足五百人本高百石ニ付

人足貳百人被頼頼左候得者極窮之百姓

一同当惑仕無廻 御上様江御手当御願

何卒御聞濟被成下置候ハ、偏ニ御慈悲ト難有

仕合奉存候以上

天保六未年八月

【読み下し】

恐れながら書付をもつて願ひ上げたてまつり候

御知行所下總国幸谷村惣百姓申し上げたてまつり候

儀は、天明三辰年砂降り後、川床高に相成り、

大雨の節は台方四拾ケ村より水落ち、

田畑一凹溢れ、皆水損に相成り、難済至極仕り、

これに依りて二十ヶ年以前より坂川堀頼ぎ願ひ仕り候処、

この度御聞き済みに相成り、然る処、川上横須買橋より

松戸迄二里余の場所、川淺い仕らず候ては水落ち

宜からず候に付き、往古より水緑村の儀に付き助け来たり候に付き、

水腐高百石に付き人足五百人、本高百石に付き

人足貳百人頼まれ、左候えは極窮の百姓

一同当惑仕り、よんどころ無く御上様へ御手当御願ひ、

何卒御聞き済み成し下し置かれ候はば、偏に御慈悲と有り難き

仕合せに存じたてまつり候、以上

天保六未年八月